

第2章 日の出町の関連文化財群

1 関連文化財群とその抽出

1) 関連文化財群のとらえ方

関連文化財群とは、「地域の歴史や文化を語る重要な地域の資産として、総合的に保存・活用を行っていく」¹ことなどを目的に、「有形・無形、指定・未指定を問わず、文化財を相互に関連性のある一定のまとまりとしてとらえる」²ものです。

文化財のあり方を考えると、個々の文化財は、それぞれが時間的・空間的な幅をもちながら、相互に深いつながりを持っているといえます。例えば、ある建物はそこに住む人の暮らし、周辺の土地利用、地域の文化や歴史、自然にかかわる文化財と深いつながりを持っています。そして、これらのつながりのある文化財を「まとまり」として考えることで、関連はあるけれども今まではあまり認識されにくかった文化財が再認識されます。また全体のつながりを見ることで、文化財の特徴を把握しやすくなり、今までとは違った観点から価値を見いだすことが可能になります。

そこで、個々の文化財の特色と関連性を総合的に把握することで、一定の空間的・時間的なつながりを明確にし、それをもとにした空間的なまとまりを「関連文化財群」として捉えることにしました。

「関連文化財群」は、日の出町の歴史文化の特徴や大切なものを再評価して捉え直し、次世代へと保存継承するための標となります。

1 文化庁(2008) 文化審議会文化財分科会企画調査会報告書

<http://www.bunka.go.jp/bunkashingikai/kikaku/houkokusho/pdf/houkokusho.pdf>

2 有松育子(2008) 文化財の総合的把握について、文化庁月報 12

2) 関連文化財群の抽出方法

関連文化財群の抽出では、個々の文化財の特色と関連性を総合的に把握するために、様々な分野にわたる文化財の歴史的、文化的なつながりの理解と、地図による空間的なまとまりの可視化を行いました。具体的には、「文化財の総合的な把握調査」の結果をもとに、日の出町の代表的な景観の中から、歴史文化の総合的な把握のために6つの景観をあげ、関連文化財群を抽出するための基盤としました。その上で、それらの景観と個々の文化財の歴史的、文化的な意味を整理し、文化財相互のつながりを検討しました。

関連文化財群の抽出にあたっては、以下のものを取り上げることが重視しました。

- ・日の出町を代表する6つの景観、「平井川」「卒塔婆産業」「セメント産業」「御嶽信仰」「丘陵里山」「山地里山」に歴史的、文化的、空間的なつながりを持つさまざまな文化財
- ・地域に多数分布し文化的な特徴を形成しているが、文化財として個別にはとりあげにくかった事象、例えば石造物や石積み、土蔵、暮らしと密着した風景や土地利用など
- ・個々の文化財としては小さなものであっても、それらが関連性をもってつながる中で、地域の重要な文化財として認識されるもの
- ・相互のつながりが一定のストーリーをもって説明される文化財

このように、より広範囲な事象から関連文化財群を抽出することで、これまでとりあげられなかった様々な地域の文化財を、あらたにとりあげることができました。

2 関連文化財群の特徴

1) 歴史文化と関連文化財群

前項で述べたように、関連文化財群は日の出町の歴史文化を特徴づけるものです。ここではまず、関連文化財群を抽出するにあたって、日の出町の歴史文化を体系的に整理しました。

これまでに述べたように、歴史文化は「自然」「歴史」「暮らし」という3つの要素が絡み合っていてできているといえます。さらに特徴的なことは、「地理的・歴史的なつながり」と「歴史文化が持つ要素」との相互作用によって歴史文化が生みだされているという点です。これらを体系的に捉えることで、日の出町の歴史文化を説明することができます。以下に、その考え方について整理しました。

(1) 地理的・歴史的なつながり

日の出町は、山地から丘陵地と台地までを含み、それを貫くように平井川が流下しています。このような複雑な地形と水系をもとにした空間的な関係は、人々の暮らしに大きな影響を与え、地域ごとの暮らし方や風習、あるいはそれを取りまく景観を形成する基礎となっています。特に、台地から丘陵地を中心とした「平井地域」と、山地から丘陵地を中心とした「大久野地域」では、地理的な違いによって暮らし方が大きく異なっています。平井地域は、人が自然環境を改変することで生まれる文化（「里」）であり、大久野地域は、圧倒的な自然環境の中でそれを享受しながら生まれる文化（「山」）であるといえます。また、それを縦断して流下する河川は、過去から現在まで変わることなく常に流れ続け、生活や生きものにとって欠かすことのできない水を育む自然であり、「里」と「山」の文化を交流させ、人々の拠としての文化をつないできたといえます。

日の出町では原始から現代へと連綿と続く時間の中で、時代に合わせて人々が暮らしてきました。また、その中で、様々な産業や信仰が生まれ、時代に合わせて変遷してきています。現在見られる日の出町の歴史文化は、これらの歴史の産物であるといえます。

このように日の出町の歴史文化は、大きくは地理的なつながりと歴史的なつながりによって形成されたものであり、これらの相互関係を捉えることが重要な視点となります。

(2) 歴史文化がもつ要素

関連する文化財群を抽出していく過程で、日の出町の歴史文化を考える上で、重要な要素が見えてきました。

多くの歴史文化の形成にかかわる自然環境に起因する重要な要素としては「木」「石」「川」が挙げられます。また、人の暮らしと歴史によって紡がれる要素としては「信仰」「産業」「街道」があり、さらにそれらの要素が合わさって視覚的にとらえられる景観としての「景」があります。

「木」 日の出町には、人々が山と森を大切にしてきたことを思わせる暮らしの記録があります。そして、この地で生産される質の高い木材でつくられた公民館、森と木々に育まれる多くの生き物、緑豊かな景観は、今なお大切にされている文化財です。また卒塔婆造りはかつてこの地に産したモミを利用し、日本一の産地として伝統的な技術をつたえています。

「石」 日の出町では、中生代から新生代までのさまざまな石を産します。固いチャート、セメント産業を可能とした石灰岩、伊奈石と呼ばれる砂岩などです。また、町には随所にさまざまな石積みが見られ、河川の護岸や社寺や民家の擁壁はもとより、急斜面のだんだん畑をつくるのにも巧みな石積みが行われており、美しい風景を形成しています。なかでも、平井川上流部にみられる一の護王神社や旧家の石垣にみられる巨石の石積みは、その材料、技術ともに、今では大変貴重なものとなっています。

「川」 平井川は日の出町の中心を流れ、川に面した斜面には家々が川への小道や階段（ガンギ）をもち、川を中心にした生活が見られます。多くの生き物もまた、川とその清流にはぐくまれてきました。

「信仰」 日の出町では御嶽山の信仰が大きな意味を持ちます。日の出町を通る道はかつては御嶽山の主要な参詣の道であったことは、今なお残る民俗行事や、道標にもあきらかです。

「産業」 日の出町には、町の生業を反映して、林業、卒塔婆産業、セメント産業、宿場などの遺産が、今なおその技術と心を残して数多くあげられます。

「街道」 平井の宿の反映にみられるように、日の出町は中世から街道を中心に栄えてきました。さらに馬頭観音や道標、石仏、板碑の分布にみられるように、御嶽参道に沿った様々な文化遺産を生みだし、それらをつなぐ要素となっています。

これらの要素は単独で重要なものとなっているだけではなく、互いに連関しており、その「つながり」から、町の歴史文化のまとまりを見いだすことができます。

これらの要素は日の出町を特徴づける関連文化財群と深いつながりを持っており、関連文化財群はこれらの要素の組み合わせとして存在しています。

<自然環境に紡がれた要素>

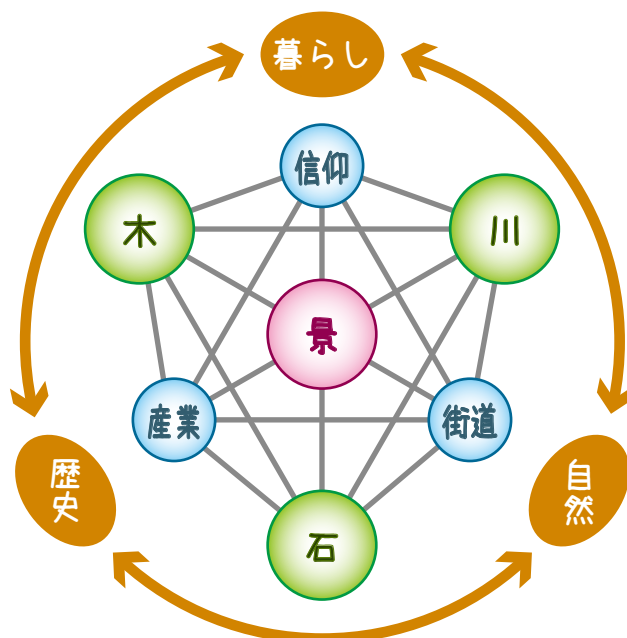
木	「き」	モミ、雑木林の生きもの 卒塔婆、スギ・ヒノキ植林
石	「いし」	石灰岩、石積み、伊奈石 石造物、橋、チャート
川	「かわ」	平井川、水辺の生きもの

<暮らしと歴史に紡がれた要素>

信仰	「しんこう」	御嶽信仰、祭り、風習
産業	「さんぎょう」	卒塔婆産業、セメント産業 林業
街道	「かいどう」	御岳参道、平井宿 五日市線岩井支線跡

<個別要素を含む景観としての要素>

景	「けい」	里山景観、山地農地、川の景観 卒塔婆の乾燥風景、勝峰山、参道景観
---	------	-------------------------------------



<日の出町の関連文化財群を捉える視点と要素>

2) 関連文化財群

日の出町にある歴史文化の要素とそのつながりや位置をもとに、日の出町の文化財は以下の6つの関連文化財群にまとめられました。これらの関連文化財群はそれぞれのテーマのもとに、そこに含まれる個々の文化財についてテーマとの関連、さらに相互のつながりを整理していくことができます。

- (1) 清流平井川 ～人々の暮らしと川の流れ～
- (2) 丘陵里山の自然と歴史的景観 ～宿場と暮らしを支えた多様な森～
- (3) 山地景観と土地利用 ～山地特有の土地利用と石積み～
- (4) 御嶽参道と信仰 ～御嶽神社へ向かう信仰の道～
- (5) 卒塔婆産業 ～モミの木が支えた暮らしと景観～
- (6) セメント産業と近代化遺産 ～東京を創り日の出町を支えた石～

関連文化財群は、空間的・時間的なつながりから、大久野地区を中心とする「山の文化」と平井地区を中心とする「里の文化」、さらに川や街道のようにふたつの地区を「つなぐ文化」という3つに大別することができます。また、それらを支えるさまざまな歴史文化の要素から、「産業」「自然環境」「信仰」という3つの視点で見ることができ、それぞれの歴史文化の根幹をなすものとなっています。



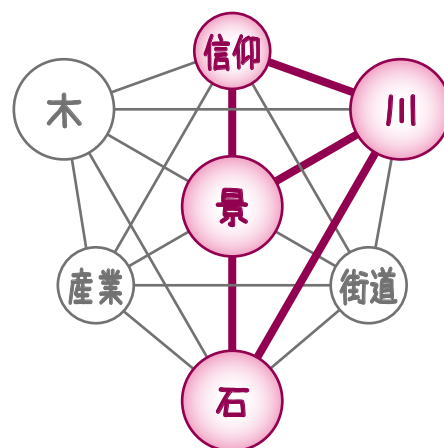
3) 関連文化財群の特徴と主な構成要素

(1) 清流平井川 ～人々の暮らしと川の流れ～

① テーマ

平井川の石積護岸や可動堰，昭和前半のコンクリート製の橋梁は，各時代の平井川と人間の関係を示す歴史遺産です。また，平井川の源流部にある倶利伽羅不動などの石造物は，河川と自然に対する畏敬の念を示し，源流部の白糸の滝は，雨乞いに使用する神水（命の水）として使われてきました。

多くの住民が後世に残したいと考えているサイノカミの行事は，平井川と人々の暮らしの関係を示すものとして現在まで続いています。



<位置づけ>

② 主な構成要素とテーマの関連性

平井川：公共下水道普及率が100%に達し，甦った清流平井川は，歴史文化に関する住民意向調査における，「後世に残し伝えたい町の代表的な景観」として第1位にあげられており，住民の憩いの場所になっています。

秋留台地と秋留原層：「秋留原層」では，今から約12,000年前頃のヤンガードリアス期の終末期（第四紀晩水期終末，急激に温暖化する時期）に大規模に土砂が堆積しました。これが秋留台地の形成に係る大きなイベントと考えられています。

三吉野遺跡群井戸端地区の「秋留原層」の土層断面：秋留原層より下位の堅穴状遺構から検出した炭化物のC14年代測定では， $10,100 \pm 50$ (CalBC)（今から約12,000年前）の数値が示されており，秋留原層の堆積年代と規模が解りました。

稲村石：平井川の侵食によって形成された稲村石は，『新編武蔵風土記稿』にも記載があり，御嶽参道のランドマークとしての役割も果たしていました。

白岩の滝：平井川源流近くに所在する白岩の滝は，近世には大久野・平井村をはじめ，近隣諸村の雨乞いの水として使用されていて，水源地特有の川に対する畏敬の念や信仰を表しています。

不動滝：平井川の支流である北大久野川の源流付近に位置する不動滝は，倶利伽羅不動や不動明王など水源地特有の石造物が分布し，川に対する信仰を示しています。



<不動滝>

平井川周辺の石積：平井川やその支流沿いには、川によってもたらされた礫を使用した石積が残されており、日の出町の特徴的な景観として位置づけられます。

トウキョウサンショウウオ・モリアオガエル：平井川に注ぐ各支流沿いの丘陵地～山地には、トウキョウサンショウウオとモリアオガエルの産卵場所が多く存在します。特にトウキョウサンショウウオの産卵場数は、都全体の20%、産卵のう数は都全体の30%を占め、都下でも重要な生息地域であり、平井川、丘陵、山地の地形を特徴づける生物です。

サイノカミ行事：小正月（例年1月の第2月曜日の未明）に平井川流域の河川敷で行われるサイノカミ行事は、町内16箇所の自治会（全28自治会中）で行われており、歴史文化に関する住民意向調査でも「後世に残したい風習等」の第1位となっています。

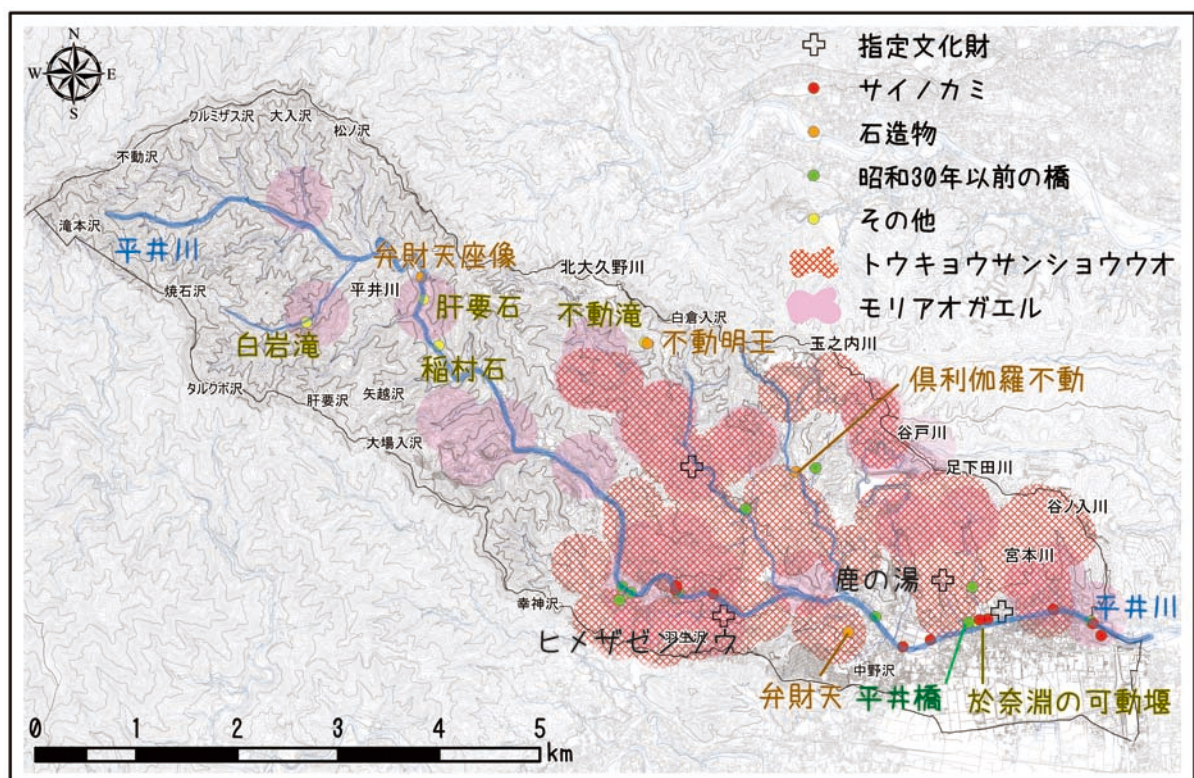
水源地特有の石造物：山地・丘陵・台地・水源地など多摩地域の地形的な特徴を全て有する日の出町では、弁財天、俱利伽羅不動など水源地特有の石造物があり、川と人をつなぐ信仰形態を特徴的に示しています。



＜玉ノ内俱利伽羅竜王＞



＜サイノカミ＞



＜清流平井川の関連文化財群＞

③ 守り伝えるべき大切なこと

- ・「歴史文化に関する住民意向調査」では、平井川やそれに関連するサイノカミの行事が、後世に残し伝えたいものとされています。これは、平井川やサイノカミの行事が人々を引きつける力が強いことをあらわしています。
- ・日の出町の自然を特徴づける平井川では、トウキョウサンショウウオをはじめとする多様な生物相が、東京にあっても今なお豊富に残されており、このことが大切です。
- ・水源地特有の石造物とその信仰に対する願いや価値観は、日の出町の川との強い関わりをあらわすもので、他地域にはない固有の歴史文化といえます。

④ 現状と課題

- ・平井川に対する愛着は、公共下水道の完全普及によって環境が改善されたことによってさらに高くなっています。また、サイノカミの行事は自治会の年中行事となっており、多くの住民が参加する行事として、大切にされています。
- ・一方で、平井川が雨乞いの行事などに果たしていた役割や、町民の水源地に対する信仰や願いについては、文化財としての価値観が変化しており、文化財と現在の私達との関係性が希薄になっていることも多くみられます。

⑤ 守り伝えるべき方策

- ・平井川に対する愛着やサイノカミの行事など、現在の評価や取り組みについては、現在の状態を維持しつつ、ガイドマップやガイドルートの作成などを行い、平井川と関連した文化財の特徴や大切さを伝える仕組み作りが必要です。
- ・サイノカミの行事など、多くの住民が愛着を持ち、残し伝えていきたいと考えている行事は、日の出町特有の歴史文化として町の外部へ発信する方策が求められます。
- ・文化財を守り伝えていくためには、文化財を知るだけでなく、見て、触れる機会の充実が必要です。学校教育や生涯学習における講座や、資料館における展示などの他、町内で行われている各種イベントとの連携を強化し、普及啓発の機会の充実が求められています。

(2) 丘陵里山の自然と歴史的景観 ～宿場と暮らしを支えた多様な森～

① テーマ

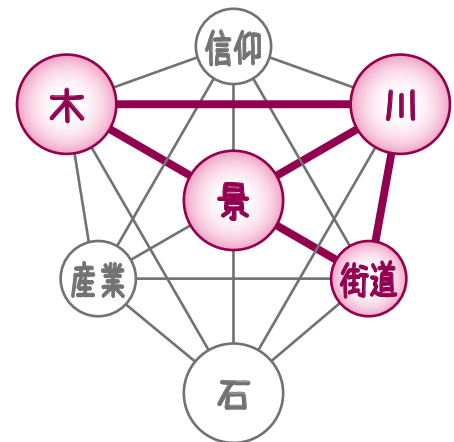
秋留台地では、縄文時代の初め（今から約1万年前）からの人々の営みが残されており、7世紀の古墳時代後期には、台地の周縁部に多くの集落遺跡が作られてきました。古代から中世にかけては、馬を生産、飼育する牧経営の担い手であった武蔵西党の小川氏や小宮氏、ついで平山氏へと経営が変遷していきます。

鎌倉道と御嶽道が交差する平井は、交通の要衝であり、西光寺の板碑の建治3年(1277)をはじめ、鎌倉道沿いの本宿や中野地区、平井川北岸の谷ノ入・足下田地区に鎌倉期～南北朝期の板碑が残されています。平井本宿は、後北条氏の宿駅として伝馬（緊急時の連絡に使う馬）を配置する交通の拠点で、市も開かれており、人々が集う場所でした。天正18年(1590)年に後北条氏が滅亡し、徳川家康が江戸に入府して近世都市として発展していくと、南北のルートである鎌倉道から東西のルートである江戸道が重要な交通路となり、近世の平井宿が発展していきます。

在方の拠点となっていた平井宿は、織物や薪炭を主とした六斎市が立てられ、拠点としての平井宿や平井市、畑作や桑畑などの生産基盤としての平井ッ原（秋留台地平井分）、平井宿や平井市と生産地を支える川北の森が機能的に配置されて、町割りの区画や社寺の所在がマチとしての空間を作り出してきました。

市街地として現在も発展していく平井地区には、歴史的な建造物は少なくなっていますが、平井地区の土蔵は近世～近代の日の出町を特徴付ける建造物です。また、歳末に行われる平井市や、伝統的な民俗芸能が往事の平井宿の精神的な拠り所として現在も残されています。

このような宿場の背景には川北の森があり、薪炭の生産地として機能していました。丘陵地と里山のつながりは羽生地区にもみられ、そこでは谷津田と雑木林が今も多様な生物相を支えています。



<位置づけ>

② 主な構成要素とテーマの関連性

西光寺の板碑：建治3年(1277)鎌倉初期の絵像板碑で、紀年名のある絵像板碑では多摩川流域でも最古に属します。平井本宿が中世平井郷の拠点であったことや、当時の篤い信仰の様子がわかります。

平井地区の中世の石造物：平井地区には、大久野地区に比べ中世の石塔などは少ないですが、中世平井市のあった鎌倉道沿いの本宿や中野地区と、平井川北岸の谷ノ入・足下田地区に鎌倉期～南北朝期の板碑が残されており、中世の信仰の様子がわかります。

保泉院の閻魔王坐像：戦国時代の文明5年(1473)に日奉(平山)重清が大檀那となって仏師了成(戒)によって作られ、平井郷の閻魔堂に安置されていました。閻魔堂は紀州熊野三社(熊野本宮・熊野速玉大社・熊野那智大社)と本末関係にあり、平井郷の中世の信仰形態を表しています。

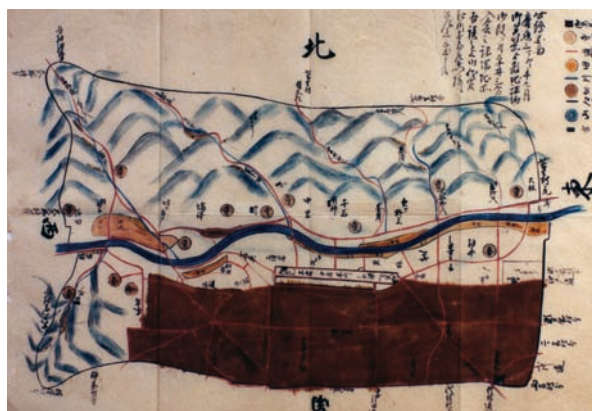
田中家文書「北条氏伝馬定、氏照印判状」：後北条氏の宿駅であった平井郷に発給された文書で、二通とも永禄5年(1562)に作成されたもので、後北条氏の伝馬制度を考える上で重要な古文書です。

平井宿の町割り：現在の平井宿通りの東西250m、巾5.4mの江戸道(御嶽道)が近世の平井宿で、平井川上流から上宿、中宿、下宿と別れていて、月毎に6の日に各宿で市が立っていました。現在も道路に面して間口が狭く奥行きが長い地割りは、当時の町割りの名残です。

平井宿の信仰を示す石仏、石塔：日の出町では、寒中に30日間念仏を唱える行法である寒念仏が江戸時代以降に盛んに行われていました。この修行が終わると記念に寒念仏供養塔を造立し、平井地区にも残されています。また、平井宿周辺にはこの他に、地藏巡りや念仏車、千日念仏供養塔などの石造物も残されており、宿に関連した信仰を示します。

平井宿に関連した旧跡・史跡：平井宿周辺には、宿と関連した史跡の高札場や、旧跡の鹿の湯があります。鹿の湯は宝光寺の開山である以船文斉(いせんぶんさい)によって天文6年(1537)年に開湯され、江戸時代には湯屋があり、多摩七湯の一つでした。明治20年頃(1887)まで開業されており、平井宿や平井市に訪れた人々にとって癒しの場でした。

平井宿を特徴付ける文書：平井地区の特徴を端的に示すものは、慶応3年(1867)の平井村絵図があります。この絵図には平井宿、平井市を核として、生産基盤である川北の谷戸田と平井ッ原の畑地(秋留台地)、平井宿や生産基盤を支えた丘陵地里山の川北の森が描かれています。平井地区を特徴付ける3つの要素は、幾多の変遷を経て現在まで繋がられています。



<平井村絵図(慶応3年)>

平井の民俗芸能：下平井の鳳凰の舞や重松流祭囃子や加美町・志茂町の山車が繰り出される春日神社、八幡神社の祭礼には多くの住民が担い手として係わっており、歴史文化に関する住民意向調査においても後世に残したい文化財に取り上げられていて、平井宿の精神的な拠り所となっています。



<春日・八幡神社祭礼>

平井市：戦国時代の16世紀後半以降に成立した中世の平井市は、「江戸道」と「御嶽道」が通る近世の平井市へと拠点を移していきました。江戸時代後期の19世紀以降になると、節季市（3月26日、5月26日、12月26日に市開催）へと変わって行きました。現在、歳の市として12月26日に行われている平井市は、中世から現代まで450年に及ぶ歴史を今に伝えています。

平井地区の土蔵：市街化が進む平井地区には、歴史的な建造物は少ないですが、近世～近代にかけて作られた土蔵が51軒残されています。多くの土蔵は、大久野焼け明治15年(1882)以降に建築されましたが、当時盛んに行われていた養蚕業による繁栄を示し、平井宿やその周辺の特徴的な歴史的景観です。

平井地区の石積の景観：市街化が進む平井地区では、歴史的な景観は少ないですが、足下田、宮本、谷ノ入地区の川北の森周辺には、古くからの石積や垣根などが残されています。春日神社、八幡神社の祭礼では、下平井の鳳凰の舞や道中であり、春日神社の御輿渡行も行われていて、歴史的な風景を作り出しています。

平井宿・平井市を支えた多様な森：平井村絵図に記載されている森には、谷戸田が作られ、雑木林は畑地の肥料や宿に薪炭を供給する暮らしに欠かせない森でした。この森には、トウキョウサンショウウオをはじめ、多様な生物が棲息していて、平井宿の人々と自然が共生していた営みを表します。羽生地区にみられる森と谷津田は今も多様な生物の生息生育地として町民によって守られています。



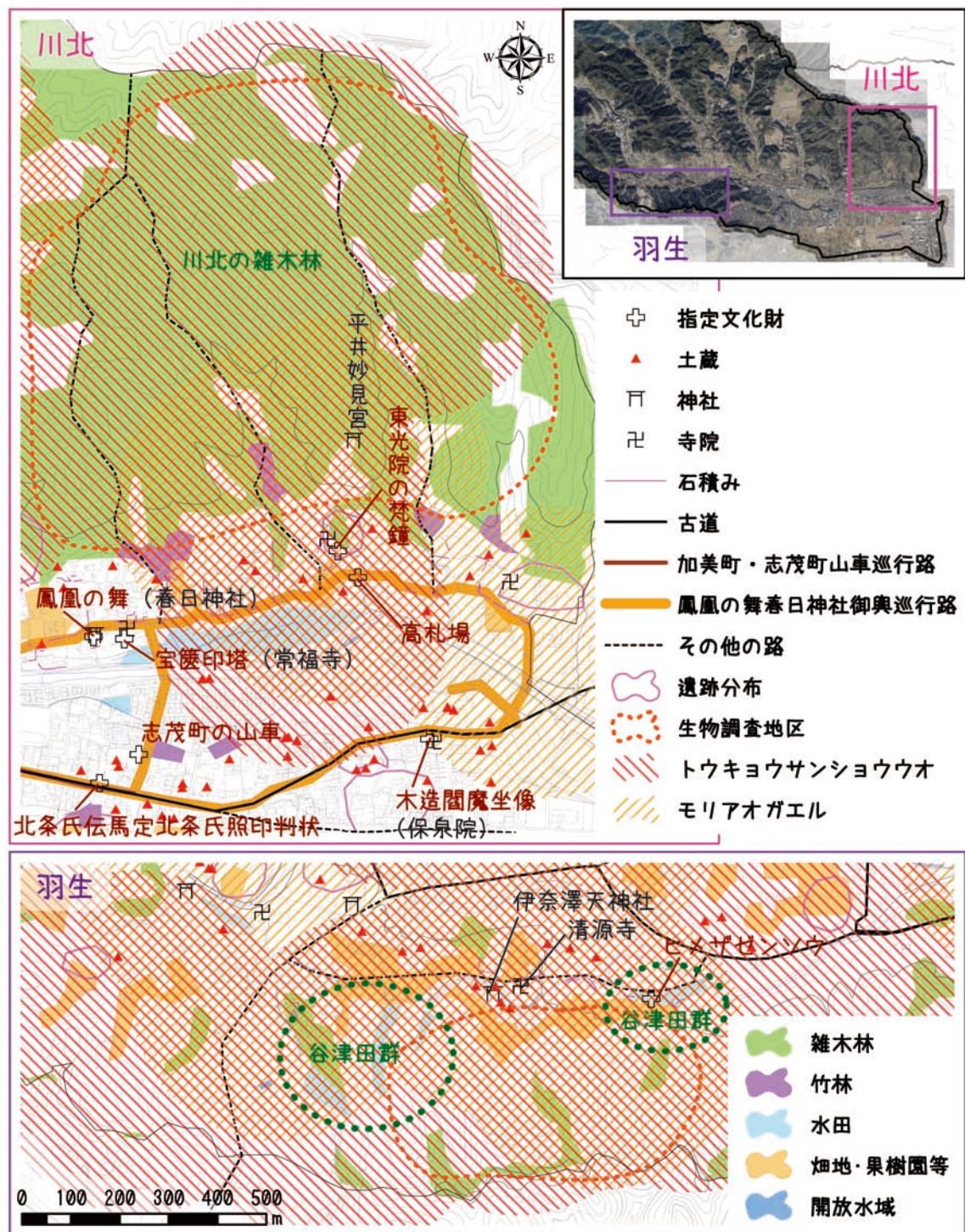
＜川北の町並みと石積み＞



＜鳳凰の舞＞



＜春日神社祭礼＞



＜丘陵里山の自然と歴史的景観の関連文化財群＞

③ 守り伝えるべき大切なこと

- ・「歴史文化に関する住民意向調査」では、鳳凰の舞や伝統的な祭りは、後世に残し伝えたいものとされています。これは、多くの住民が参加する祭などの民俗芸能を求めることが強いことを示しています。

- ・歳の市として行われている「平井市」は、中世からの歴史を有し、「平井宿」の歴史を特徴的に示す行事です。
- ・平井地区の石積みの景観は、地形的な特徴に基づいた治山・治水対策の一環であり、農地の確保や歴史的なまちづくりの手法です。鳳凰の舞や神輿の巡行のルート上では、歴史文化と周辺環境が一体となった独特な風致を形成しています。
- ・平井宿は、宿を支える多様な森、生産地である「平井ッ原」と関連性を有しながら長い歴史を育んできました。平井宿や平井市を支えた川北の森は、歴史文化の基盤となる里山の景観が残されています。
- ・川北と羽生に残る里山の景観は、「歴史文化に関する住民意向調査」の町の代表的な景観の第4位となっています。

④ 現状と課題

- ・平井地区の祭礼として位置づけられる、春日神社、八幡神社の祭礼には、鳳凰の舞や多くの伝統的な民俗芸能の演技が行われ、芸能の担い手である保存団体には多くの住民が参加していることから、文化財としての価値が維持され、保存継承が行なわれています。
- ・歳の市である「平井市」は西多摩地域の歳時記であり、正月の飾りを中心にした諸道具が販売され、年越しの行事となっています。
- ・平井宿に関連した祭礼や年越しの行事には、多くの住民が参加しているため、自覚的に歴史文化の要素として評価、認識している一方で、平井宿や平井市の歴史との関連性や位置付けに関しては、認知が浸透していない状況です。
- ・平井宿と、宿を支える森、生産地である平井ッ原などの関連性や、平井地区に所在する中世から近世の石造物とその信仰や願いなどに関しては、価値観の変化の中で、私達との関係性が希薄になっていることも多くみられます。

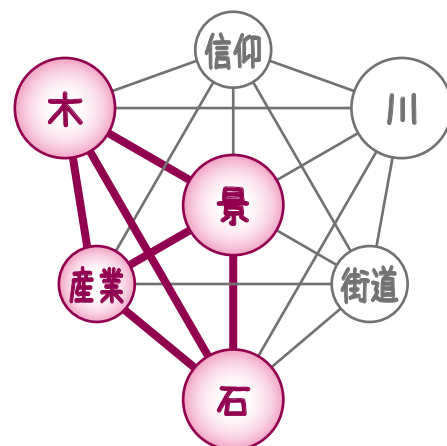
⑤ 守り伝えるべき方策

- ・平井地区の祭礼と伝統的な民俗芸能など、現在の評価や、活性化に関する取り組みについては、現在の状態を維持しつつ発展を促し、ガイドマップや、ガイドルートの作成などを行い、平井宿と関連した文化財群の特徴や大切さを伝える仕組み作りが必要です。
- ・平井市など、多くの住民の方が愛着を感じる行事は、活性化を助長し、日の出町特有の歴史文化として町の外部へ発信する方策が求められます。
- ・宿を支えた多様な森は、日の出町を特徴付ける丘陵里山の景観であり、自然環境を基盤とした歴史文化を守り伝えていく仕組み作りが求められています。
- ・文化財を守り伝えていくためには、文化財を知り、見て、触れる機会の充実が必要です。その機会は、学校教育や生涯学習における講座、資料館における展示などのほか、町内で行われている各種イベントとの連携を強化し、普及啓発の機会の充実が求められています。

(3) 山地景観と土地利用 ～山地特有の土地利用と石積み～

① テーマ

丘陵から山地地形を形成する大久野地区は、江戸時代の中頃以降になると林業や卒塔婆生産が中心となる産業となり、山との関わりが深い地域であり、山地特有な文化を育んできました。水口の山祇社や坂本の神明社などの山に対する信仰や、小澤一彦家の山の生活を基盤とした行事などは、人々の暮らしと山に対する関係を象徴的に表しています。また、山地という地形的な特徴から、各集落内の繋がりが強く、地区の精神的な拠り所である伝統的な行事や民俗芸能が保存継承されています。このような地区の結束は、江戸時代中期の田安領で発生した宝暦箱訴騒動に関する北大久野村の民衆の結集にも端的にあらわれています。



<位置づけ>

また、日の出町の特徴である石積に関しては、河川上流部であることから、平井地区に比べて大型の礫や巨石を用いて作られており、山地裾部の狭小な耕作地と相まって独特な風景を作り出しています。

大久野地区は、樹木を主とした天然記念物が多く、今も大切に保存されています。これは、樹木を業とした人々の歴史的な変遷と、樹木に対する愛着を今も伝えています。

② 主な構成要素とテーマの関連性

大久野地区の天然記念物：大久野地区には、幸神神社のシダレアカシデ、大久野のフジ、赤保谷家のヒイラギ、濱中家のサルスベリ、高原社の杉、ヒメザゼンソウなど、樹木を主とした植物の天然記念物が多く指定されています。歴史文化に関する住民意向調査における文化財の認知度では、シダレアカシデやフジが高くなっています。



<シダレアカシデ>

山の信仰：水口の山祇社や坂本の神明社など

は、集落に隣接する山上に社を配置して地区の鎮守として信仰の対象にしています。また、屋敷の背後に控える山に石祠を据え、屋敷内の山の神を祀っている家も多く残されており、山地に住む人々の山に対する篤い信仰が今も残されています。

水口の双盤念仏：双盤念仏は、鉦と太鼓により「南無阿弥陀仏」の念仏を唱える念仏講で、江戸時代には関東以西の西日本全域に分布していました。都内でも多くの寺院で行われていましたが、保存継承する団体は6団体に過ぎません。水口の双盤念仏は、念仏講としては寒念仏講と

の関連が考えられ、地区の人々の強い繋がりによって今も保存伝承されています。

宝暦箱訴騒動に関する史料と史跡：宝暦箱訴騒動は、江戸時代中期の宝暦11年(1761)武蔵国田安領における年貢増徴政策に端を発し、多摩郡近郷の19カ村が減免運動を行った事件です。北大久野村では、名主神田兵右衛門(牢死)をはじめ多くの人に厳しい処罰が下されました。長井・水口周辺には、一揆衆が一味神水したと思われる長井大滝をはじめ、神田兵右衛門墓碑などの史跡や、古山常右衛門が享和3年(1803)に克明に記した宝暦箱訴騒動記録(古山洋一家文書)など多くの資料があります。

大久野地区の信仰を示す石仏、石塔：日の出町には、寒念仏供養塔が多く残されていて、江戸時代の信仰を特徴的に示します。また、肝要谷周辺で多く残されている馬頭観音は、御嶽信仰の道の交通や江戸時代以降の木材の運搬などに用いられた馬に対する信仰の表れです。

大久野焼けと土蔵：明治15年(1882)3月17日に発生した大久野焼けは、東西5.2km、南北1.2kmの範囲を焼き尽くし、当時の総戸数の約3割が被災する未曾有の災害でした。この災害により中世から近世の建造物は焼失しましたが、防火施設としての土蔵が再評価され、現在153棟(大久野102, 平井51)の土蔵が残されています。山地に点在する土蔵は、大久野地区を特徴付ける景観です。



＜水口の山祇社＞



＜坂本の神明社＞



＜斜面農地とその景観＞



＜小澤一彦家小正月の行事(オシラサマ)＞

大久野地区の古民家：大久野焼けの災害を免れた範囲には、江戸時代の後期から明治時代にかけての古民家が残されています。明治9年(1877)建造の太陽の家武家屋敷，日の出山荘(江戸時代後期 1859 年頃の旧故長井家住宅)は，ボランティアへの開放や，展示施設として利活用されています。

大久野地区の民俗芸能：大久野地区には，長井神田囃子，幸神囃子(重松流祭り囃子)，玉の内の獅子舞など各地区に伝統的な民俗芸能が保存伝承されていて，各地区の精神的な拠り所となっています。

山の暮らしと信仰：小澤一彦家の年中行事の小正月の行事などは，山で生活する人々の暮らしと信仰のあり方がわかります。また，大久野の山地部分は，山地と狭小な耕作地と民家など大久野地区を特徴付ける景観を構成しています。

大久野地区の石積：大久野地区の石積は，平井地区に比べて大形の礫や巨石が使われています。御嶽参道沿いの肝要から三ツ沢地区には，一の護王神社や小澤一彦家などで数年から十数年の歳月をかけて積み上げられた石積が残され，この地区の人々の石に対する思いが伝わってきます。



＜ヤマの神への祈り＞



＜日の出山荘（旧故長井家住宅）＞

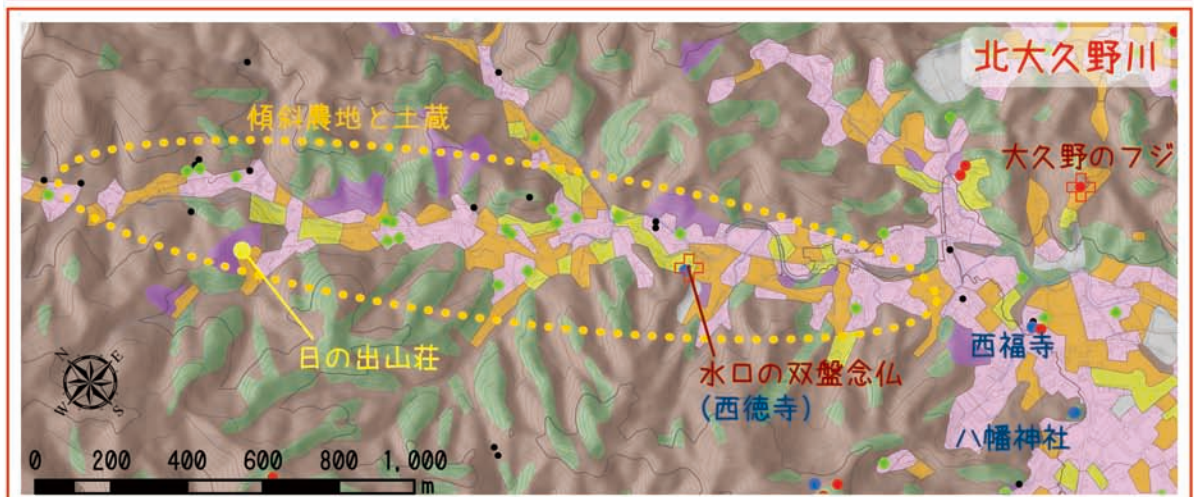
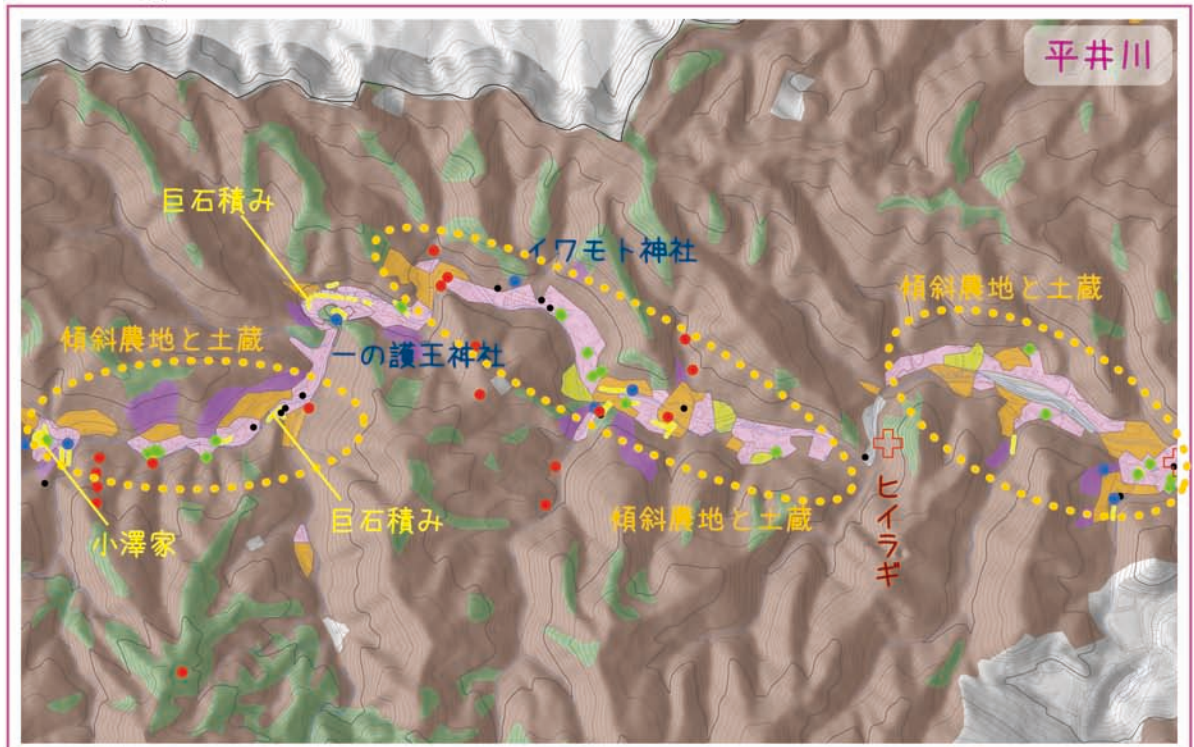
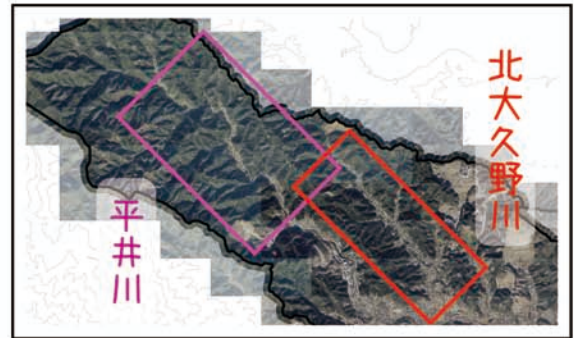


＜石積みと土蔵＞



＜小澤一彦家の小正月行事＞
(アボヘボ：粟穂と稗穂)

- | | |
|---------|---------|
| ⊗ 指定文化財 | 植生 |
| ● 名木 | 畑地 |
| ● 土蔵 | 果樹園 |
| ● 社寺 | 住宅地 |
| ● 石造物 | 自然林・二次林 |
| ● その他 | 植林 |
| 〰 石積み | 竹林 |



<山地景観と土地利用の関連文化財群>

③ 守り伝えるべき大切なこと

- ・「歴史文化に関する住民意向調査」では、町を代表する景観として山地から低地など起伏に富んだ地形や、山間の集落の景観があげられています。これは、日の出町が多摩地域の地形的な特徴を網羅し、豊富な自然と多様な生物相や自然環境が人々を引きつける力を持っていることを示しています。
- ・大久野地区の樹木を中心とした天然記念物は、木を業とした人々の営みや想いを象徴的に示しています。
- ・丘陵から山地の大久野地区は、木を業とした人々の暮らしを伝える山地の景観や、歴史的な伝統行事や風習が今も色濃く残されています。
- ・大久野地区の石積みの景観は、平井地区に比べて大形の礫や巨石を用いて作られており、歴史文化と一体となった独特な風致を形成しています。

④ 現状と課題

- ・大久野地区では、水口の双盤念仏など伝統的な風習や民俗芸能が行われ、芸能の担い手である保存団体には多くの住民が参加するなど、文化財としての価値が維持され、保存継承が行われています。一方で、少子高齢社会の進行により、担い手の育成が課題となっています。
- ・小澤一彦家の年中行事は、山地特有の年中行事であり、山の暮らしと信仰や願いを象徴的に表すものですが、保存や継承の方法や仕組み作りが課題となっています。
- ・大久野地区の豊富な緑地や自然環境は、町を代表する景観として認識されていますが、大久野地区に所在する中世から近世の石造物とその信仰や願い、宝暦箱訴騒動に関する歴史などに関しては、信仰や価値観の変化の中で、と現在の私達との関係性が希薄になっていることも多くみられます。

⑤ 守り伝えるべき方策

- ・大久野地区の伝統的な風習や民俗芸能の活性化に関する取り組みについては、現在の状態を維持しつつ発展を促し、ガイドマップや、ガイドルートの作成などを行い、山地で育まれた文化財群の特徴や大切さを伝える仕組み作りが必要です。
- ・大久野地区の石仏の信仰や、宝暦箱訴騒動の記録など山地特有の歴史文化を、残し伝えていく仕組み作りが求められています。
- ・大久野地区の巨石の石積と農地や宅地など山地特有の景観と、人々の暮らしや祈りを表す年中行事は、日の出町特有の歴史文化であり、保存継承する仕組み作りと、町の外部へ発信する方策が求められています。
- ・文化財を守り伝えていくためには、文化財を知るのみではなく、見て、触れる機会の充実が必要です。その機会は、学校教育や生涯学習における講座、資料館における展示などのほか、町内で行われている各種イベントとの連携を強化し、普及啓発の機会の充実が求められています。

(4) 御嶽参道と信仰 ～御嶽神社へ向かう信仰の道～

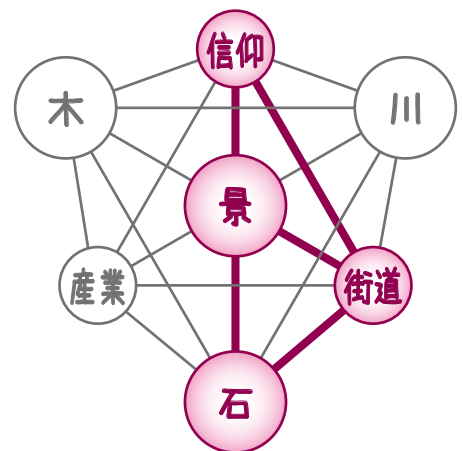
① テーマ

武州御嶽山は、鎌倉初期以降の創建と考えられ、平安末から鎌倉初期にかけて当地域周辺を跋扈していた修験者によって開山されたと考えられています。日の出町には、修験に関わる文化財も散見し、鎌倉中期と推定される熊野権現御正体、室町時代末期の山王権現御正体のほか、真言宗系寺院も存在し、真言宗・天台宗・熊野信仰ら様々な宗派による教線の痕跡があります。

鎌倉時代以降の中世は、青梅から日の出～八王子を経て相模国に至る南北のルートである鎌倉道が重要な交通路で、人の往来も盛んでしたが、江戸時代になると、江戸に向かう東西のルートである江戸道が主要な交通路となり、街道の整備や多摩川の水運の発達などに伴い、御嶽山へのアプローチは、徐々に青梅市側が主要な交通路となっていきます。

旧御師の久保田家に残されていた午王旦那売渡証文享保4年(1719)によれば、師檀関係については山上の御師に限定される御嶽山の信仰組織の再編と、交通路の変遷に伴う人の移動方法の変化により、旦那の権利を売り渡し、御師を廃業したものと考えられます。

江戸時代の中期に久保田家は御師としての生業を廃しますが、神奈川県方面からの御嶽詣りには肝要谷を経て御嶽山へアプローチする交通路が利用され、人の往来も盛んに行われていたと考えられます。肝要谷に多く残されている馬頭観音など道に関連する石仏は、当時の人々の往来と道中の無事を祈る信仰を今に伝えています。御嶽道は、中世から幾多の変遷を経ながら現在まで続いています。



<位置づけ>



<肝要の道標>
大正13年(1924)



<寛保の道標>
寛保元年(1741)



<一の護王神社>

② 主な構成要素とテーマの関連性

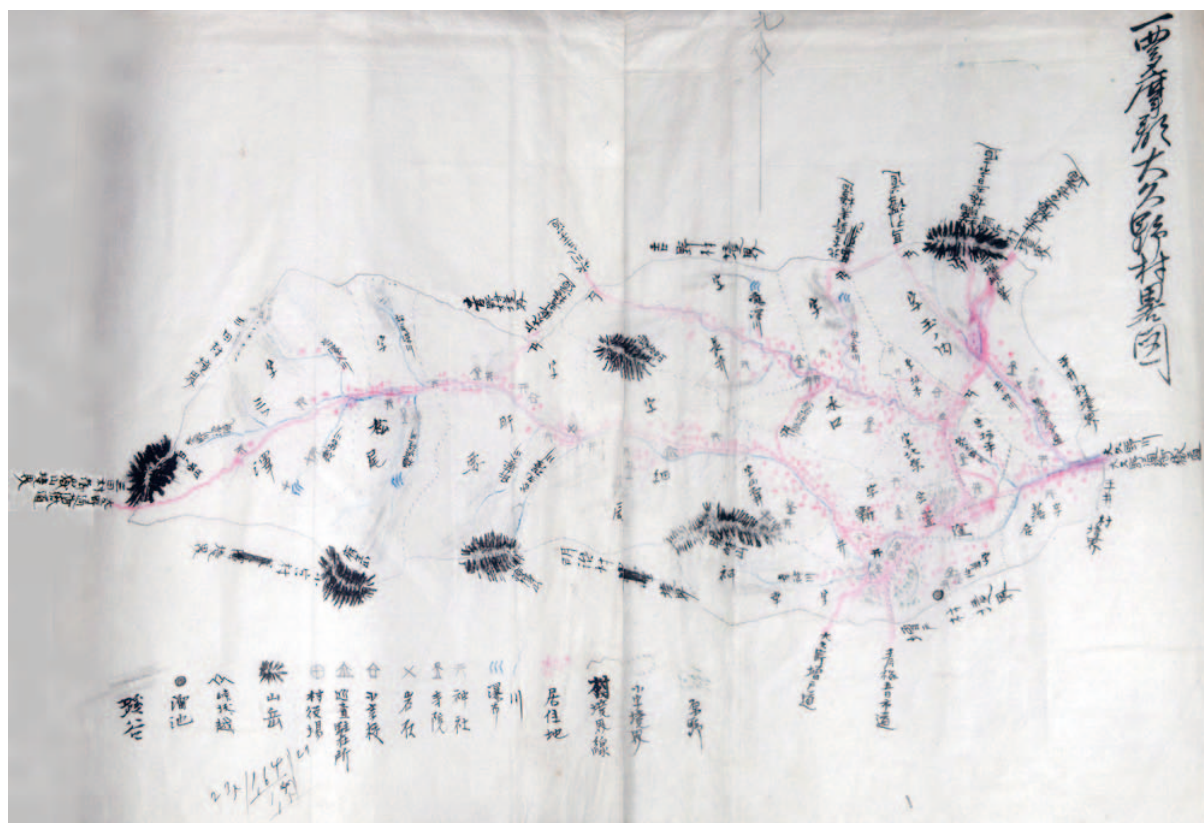
日の出町の寺院と仏像：御嶽参道沿いには、中世から近世の寺院や堂宇と仏像などが分布し、盛んな信仰を示すとともに、御嶽山へのランドマークとしての役割もありました。

新井薬師堂の仏像：御嶽参道である肝要谷の入口にあたる新井薬師堂には、木造薬師如来坐像（平安時代末期の12世紀後半）と木造阿弥陀如来立像及び両脇侍立像（3軀）（鎌倉時代中期の13世紀後半）があり、古代から中世への信仰を特徴的に示します。

日の出町の板碑と中世の石塔：総数416基に及ぶ板碑や中世の石塔は、多くは御嶽参道沿いに分布しており、板碑の造立は御嶽山参詣に往来した人々がもたらした経済的繁栄の結果と考えられます。

道の特徴付ける石造物：御嶽参道沿いには、馬頭観音や道祖神などの石仏や道標など、道に関連した石造物が多く残されています。御嶽道の呼称は近世から近現代にまで及び、肝要にある大正13年の道標にも御嶽神社が記載されています。

近現代の道の変遷を示す資料：旧大久野村文書には、参謀本部陸地測量部の調査に関する資料が残されています。陸地測量部の調査は明治40年(1907)、大正10年(1921)、昭和4年(1929)年に行われており、「大久野通り御嶽道」から「福生御嶽道」へと変わっています。現在の都道184号は、昭和の初年頃までは「御嶽道」と認知されていました。



<陸軍参謀本部陸地測量部関連調査>

旧御師の久保田家住宅と古文書：日の出山の山麓にあたる滝本には、江戸時代中頃まで御嶽山の御師を務めていた久保田家住宅があり、享保4年(1719)年の御嶽山午王旦那売渡証文が残されていました。

一の護王神社と周辺の景観：一の護王神社は、御嶽山の近世から近代には札所でした。周辺には、旧道が残されており、往時の御嶽参道の佇まいが残されています。

三ツ沢の小澤一彦家の年中行事：御嶽参道に分岐する三ツ沢の小澤一彦家は、現在も御嶽山と師檀関係を有していて、三ツ沢7戸で講が組織されていて、年末の「キリハギ」「イモモライ」など中・近世から行われていた行事を今に伝えています。



＜大口真神の護符＞

白山神社の大般若波羅蜜多經：「大般若波羅蜜多經」600巻は、南北朝～室町時代の文和5年～応永年間(1356～1428)に作成され、大檀那は平山氏重です。この教典は、萱窪の大義山能仁寺が廃寺になったため、そこにあったものを白山神社に移したものです。鎌倉道と御嶽道が交錯する萱窪の地における中世の信仰を伝えています。



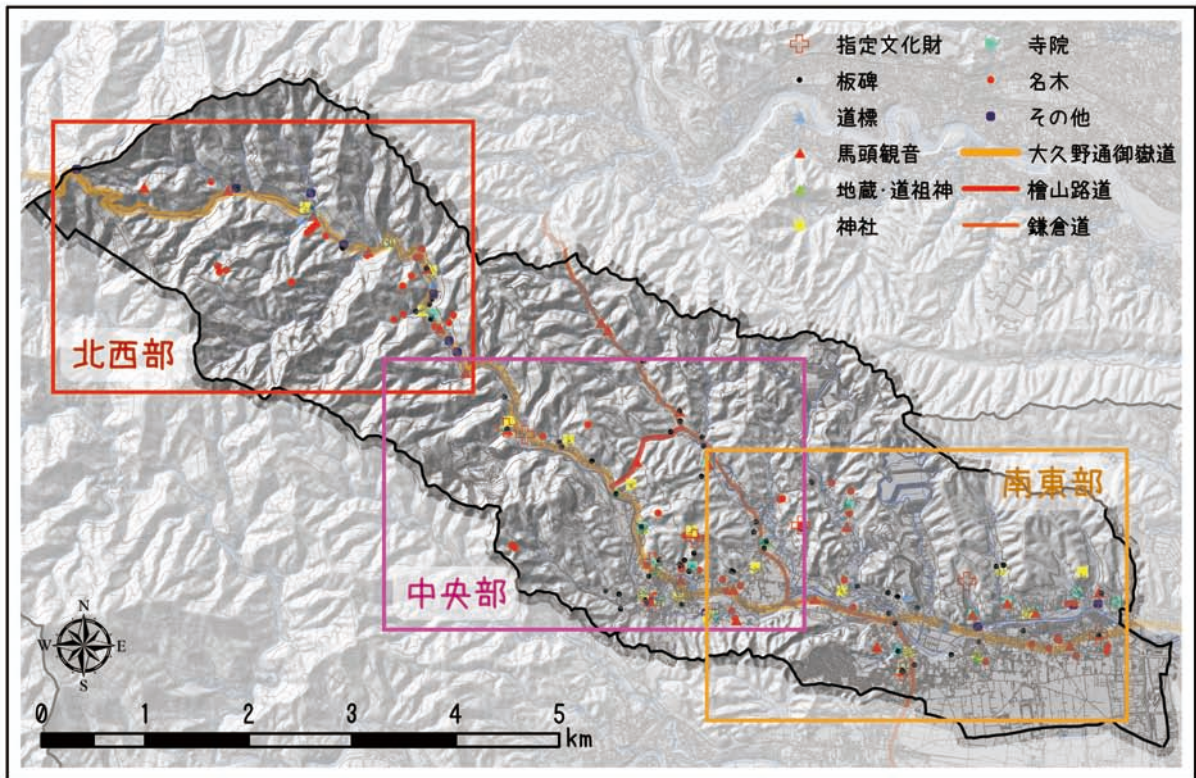
＜稲村石＞



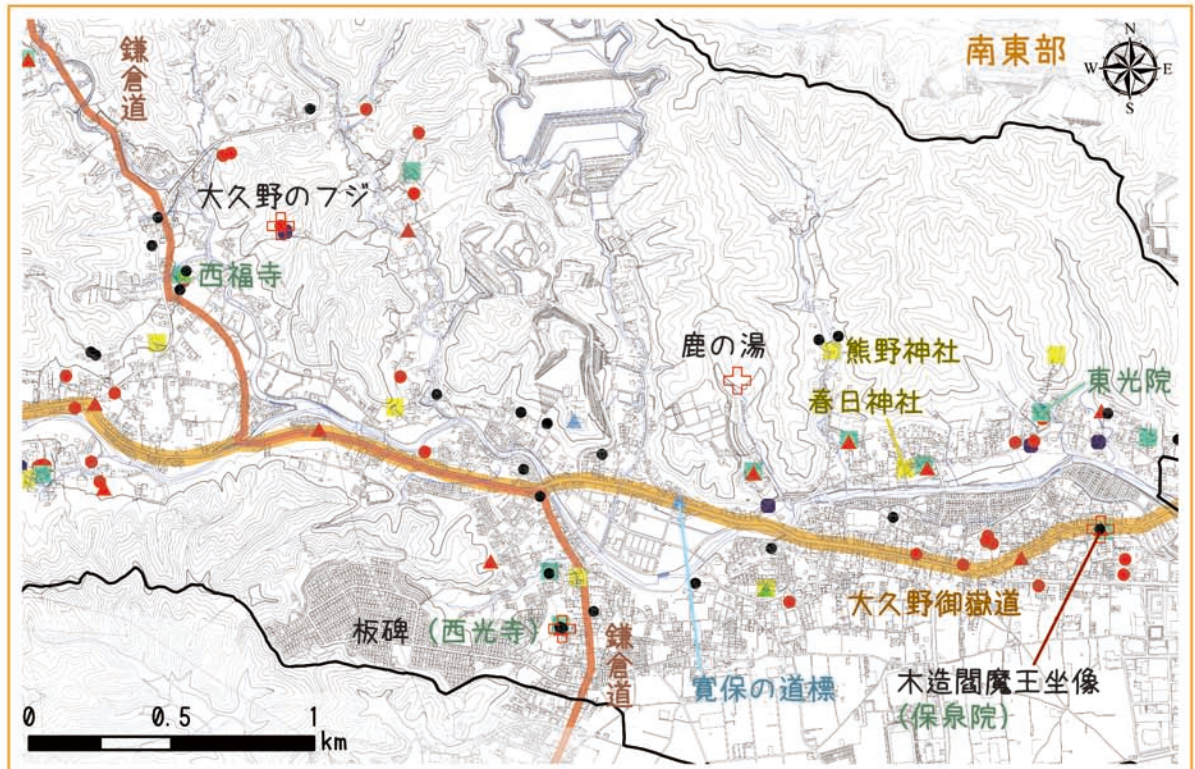
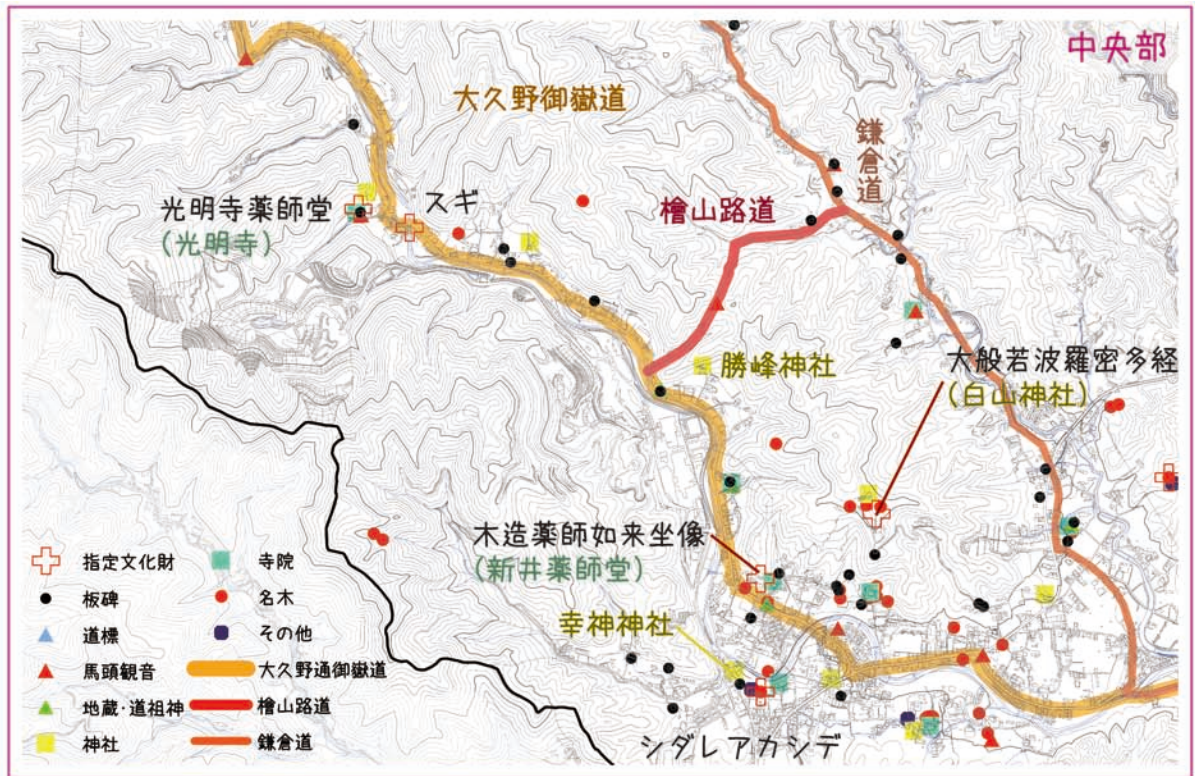
＜小澤一彦家の年中行事（イモモライ）＞



＜小澤一彦家の年中行事（キリハギ）＞



< 御嶽参道と信仰の関連文化財群（全体図・北西部） >



< 御嶽参道と信仰の関連文化財群 (中央部・南東部) >

③ 守り伝えるべき大切なこと

- ・御嶽信仰は、日の出町の中世から近世の歴史を考える上で、欠くことの出来ないものであり、小澤一彦家の年中行事は、長い歴史の中で守り伝えられてきた祈りや願いを象徴的に示しています。また、御嶽山の大口真神の護符は、町内各所で貼られていて、現在も御嶽信仰との深い関連性を特徴付けています。
- ・御嶽参道沿いの馬頭観音などの石仏や道標、参道沿いの社寺や仏像は、中世から近世を中心とする信仰の形や願いを今に伝える文化財です。
- ・肝要地区の一の護王神社周辺の巨石積みの景観や佇まいは、旧御嶽参道の景観を色濃く残しているもので、御嶽信仰の歴史的な景観と自然環境が一体となった独特な風致を形成しています。

④ 現状と課題

- ・現在、御嶽信仰を象徴的に表す大口真神の護符は、町内各所で貼られており、御嶽信仰との関連性を認識することができます。一方で「歴史文化に関する住民意向調査」では、御嶽参道に関する景観への認識が低く、信仰形態や生活環境の変化に伴い、文化財としての価値観が風化し、文化財と現在の私達との関係性が希薄になっていることがわかります。
- ・三ツ沢地区の小澤一彦家をはじめとする御嶽講と関連する行事は、山地の暮らしと信仰や願いを象徴的に表すものですが、保存や継承の方法や仕組み作りが課題となっています。

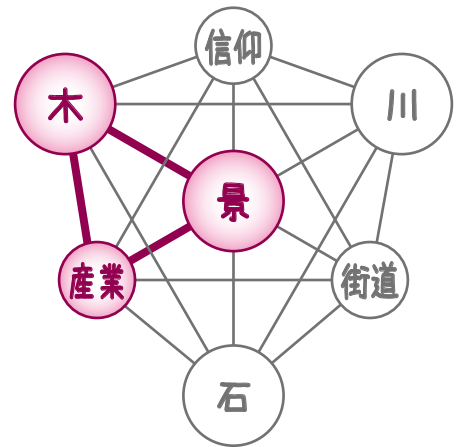
⑤ 守り伝えるべき方策

- ・御嶽信仰の歴史や関連する文化財の保存と活用を促進し、ガイドマップや、ガイドルートの作成などを行い、山地で育まれた暮らしと御嶽信仰の歴史文化の特徴や大切さを伝える仕組み作りと、町の外部へ発信する方策が求められています。
- ・山地の暮らしや御嶽信仰を象徴的に示す小澤一彦家の年中行事は、行事の映像記録や保存や公開の方法など、残し伝えていく仕組み作りが求められています。
- ・文化財を守り伝えていくためには、文化財を知り、見て、触れる機会の充実が必要です。その機会は、学校教育や生涯学習における講座、資料館における展示などのほか、町内で行われている各種イベントとの連携を強化し、普及啓発の機会の充実が求められています。

(5) 卒塔婆産業 ～モミの木が支えた暮らしと景観～

① テーマ

卒塔婆産業の発祥の家である羽生家は、後北条氏の領国における地侍であり、天正18年(1590)の北条氏滅亡後は地域に帰農し、近世村落の村役となっていきます。卒塔婆の産業の成立については、元禄期という伝承がありますが詳細は不明です。18世紀の初頭は、青梅材の一翼を担っていた大久野村の林業が百姓立山の植林や造林が盛んになる時期でもあり、自生のモミ林を伐採して建築材としてのスギ・ヒノキの植林が行われた過程で、卒塔婆産業が成立・発展したものと考えられます。当時は、日の出町一帯にモミ林が多くあり、原材料の入手の利便性が高かったと考えられ、長井・羽生・川北地区に現在も残るモミ林は往時の面影を残しています。



＜位置づけ＞

羽生家で行われている先祖祭りは、羽生平山大権現の幟旗を掲げ、西党平山氏の後裔であることを宣言するとともに、血縁的つながりを確認する重要な行事で、近世初頭期から現在まで続いている羽生地区の歴史を示す象徴的な行事です。

羽生地区は明治15年(1882)の大久野焼けで一帯が罹災しましたが、その後に再建された上羽生家、中羽生家、西羽生家など豪壮な屋敷構えを有する住宅を核とした近代の景観が残されています。地区で行われている、八坂神社の祭礼や伊奈澤天神社の祭礼は、上羽生家の門前に伊奈澤天神社、自治会館、清源寺などが配置されているため、この空間を中心に行事が行われ、精神的な拠り所である幟旗もあげられています。羽生通りは、南側に共有林を有する丘陵が控え、その前面には丘陵からの用水路が配されていて、畑地や水田など丘陵里山の景観と多様な生物も生息しています。また、豪壮な住宅には前栽畑が配置され、日常の食卓に供される作物が植えられた風景が今も残されています。日の出町の卒塔婆生産の業者は、現在20数件ですが、羽生地区の歴史的な変遷と景観は木を業とした人々の営みを特徴的に示すものです。

② 主な構成要素とテーマの関連性

羽生通りの景観：豪壮な住宅群や周辺の丘陵里山の景観は、自然と人が調和した営みを特徴的に示し、歴史文化に関する住民意向調査における「後世に残したい場所・風景」の第4位となっています。

羽生地区の近代建築：羽生地区は、明治15年(1882)の大久野焼けで罹災し、多くの建造物が焼失しましたが、大火後に復興していきました。近代建築である上羽生家住宅、中羽生家住宅、西羽生家住宅など豪壮な住宅と前栽畑などの屋敷構えは地区を特徴付けるものです。

卒塔婆に関連する風景：町内各所で見られる卒塔婆の用材を乾燥させる風景は、日の出町特有のものであり、歴史文化に関する住民意向調査における「町の代表的な景観」の第6位となっています。

卒塔婆産業と生産技術：全国シェアの6割を示す卒塔婆産業は、モミの自生林に恵まれた地理的環境と、林業の興隆という歴史的要因により発展してきました。伝統的な生産技術は保持者が減少していますが、卒塔婆産業の歴史を示しています。

羽生家の歴史を示す資料：神明社の棟札には、肝煎り羽生次右衛門慶長9年(1604)の記載があり、羽生大権現縁起棟札延宝8年(1680)など羽生家の由来を示す資料は、地区の開発の歴史を示しています。

羽生平山大権現：中羽生家の南方の丘陵上(権現山)にある羽生平山大権現は、羽生各家の先祖を祀っており、精神的な拠り所となっています。例年4月15日に行われるゴセンゾマツリは、中羽生家の当主が幟旗を掲げ、各家の当主が参拝し、血縁関係を確認する大切な行事です。



＜羽生岳史家の長屋門と卒塔婆＞



＜蔵巡り（羽生卓史家）＞

中羽生家の年中行事：卒塔婆と林業を家業とする中羽生家は、ゴセンゾマツリの宿となり、縁起棟札や幟旗などを保管して行事を主催するほか、年中行事が残されています。

羽生地区の行事：羽生地区で行われる八坂神社や伊奈澤天神社の祭礼は、諸施設（清源寺、伊奈澤天神社、自治会館、共有蔵など）が上羽生家に隣接しているため、地域の中心的な場として行事が行われています。また、伊奈澤天神社の祭礼で作られる豆太鼓は、一旦衰退した後に復興され、伝統的な行事を保存継承する地区の人々の意欲がうかがえます。

羽生地区の田んぼ：丘陵里山の景観を残す羽生地区は、小規模な谷戸田が今も耕作されています。佐久間敬次家の田んぼは、NHK 番組の『アインシュタインの眼「田んぼ一命の小宇宙」』で耕作の様子と、多様な生物や自然と共生する営みが記録されています。

羽生地区の多様な生物相：丘陵里山を基盤にした羽生地区には、多様な生物が生息する里や森が残され、自然と人の営みが一体となった環境が保たれています。



＜羽生平山大権現＞



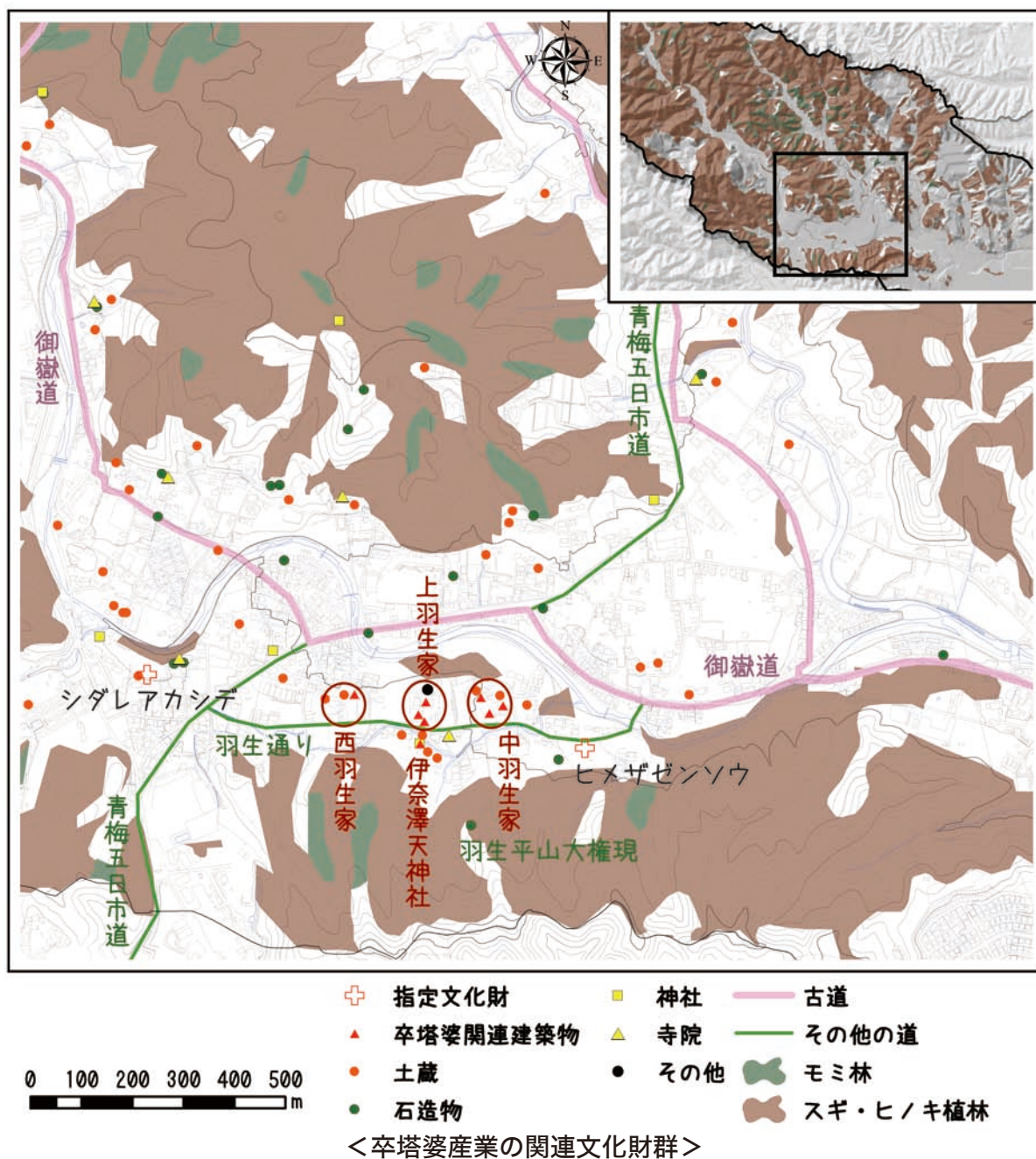
＜伊奈澤天神社幟旗＞



＜伊奈澤天神社祭礼の豆太鼓売り＞



＜モミ林と石積み＞



③ 守り伝えるべき大切なこと

- ・羽生地区の自然環境を基盤とした丘陵里山や屋敷のある景観は、「歴史文化に関する住民意向調査」で町の代表的な景観や、後世に残し伝えたいものとされています。これは、蔵巡りなどのガイドツアーや、住民の自主的なウォーキングなどによって触れられ、羽生地区の歴史文化が人々を引きつける力が強いことを示しています。
- ・羽生地区の景観や卒塔婆の景観は、「歴史文化に関する住民意向調査」の町の代表的な景観とされており、町の景観を特徴付けるものです。

- ・羽生地区の景観は、林業や卒塔婆産業など歴史的な産業によって育まれ、守り伝えられてきたものであり、伊奈澤天神社の祭礼や地区の行事など、自然環境と歴史文化が一体となった独特な風致を形成しています。
- ・羽生家の先祖祭りは、一族の貴重な民俗行事であると共に、地区の歴史や暮らしを伝える行事であり、羽生地区の伝統的な営みや歴史文化を特徴付ける行事となっています。
- ・羽生地区の歴史的な景観の形成は、周辺の良い自然環境と多様な生物相、佐久間敬次家の田んぼが象徴的に示す人と自然が共生した暮らしや、営みのあり方によって育まれ、歴史文化の独特な風致の基盤となっています。

④ 現状と課題

- ・羽生地区で行われる、八坂神社、伊奈澤天神社の祭礼は、豆太鼓作りや各種行事に、その担い手である地域住民が多く参加していることから、文化財としての価値が維持され、保存継承が行なわれています。また、行事の参加者も地区で結束し、行事の保存と継承に高い意欲が認められます。
- ・伝統的な卒塔婆産業は、全国シェア6割を示し、市場の拡大により機械化が進行し、古くからの手仕事による知や技が失われつつあり、伝統的な技術の保存や継承のための仕組み作りが課題となっています。
- ・市街化区域に設定されている羽生地区は、旧来の耕地の宅地化も進み、地区固有の文化的な景観との整合や調和が課題となっています。

⑤ 守り伝えるべき方策

- ・羽生地区の歴史文化や自然環境、伝統的な民俗行事などの評価や活性化に関する取り組みは、現在の状態を維持しつつ発展を促し、ガイドマップや、ガイドルートの作成などを行い、自然環境と共生した木を業とした人々の歴史や暮らしの特徴や大切さを伝える仕組み作りが必要です。
- ・羽生地区の景観の核となる建造物については、文化財としての高い価値が多く住民より評価されているので、保存と継承の措置を推進し、日の出町特有の歴史文化として町の外部へ発信する方策が求められています。
- ・伝統的な卒塔婆産業の歴史を象徴的に示す手仕事の知や技は、映像などによる技術の記録や、伝承者の把握と知や技の継承が求められています。
- ・文化財を守り伝えていくためには、文化財を知り、見て、触れる機会の充実が必要です。その機会は、学校教育や生涯学習における講座、資料館における展示などのほか、町内で行われている各種イベントとの連携を強化し、普及啓発の機会の充実が求められています。

(6) セメント産業と近代化遺産 ～東京を創り日の出町を支えた石～

① テーマ

勝峰山の東側斜面に広がる石灰岩は、層内にウミユリやサンゴ、紡錘虫（フズリナ）などの化石が発見され、対岸の岩井の貝沢には、中生代三畳紀後期（約2億2千万年前）の示準化石であるエントモノチス（モノチスオコチカ）やアンモナイトなどの化石が発見されて、石灰岩を含む地層の年代が解ります。

石灰岩は酸に弱く、降雨などにより溶解し、奇岩、奇勝を作り出し、ドリーネの地形が血の池の伝承や鈴が石の伝承を生み出しました。

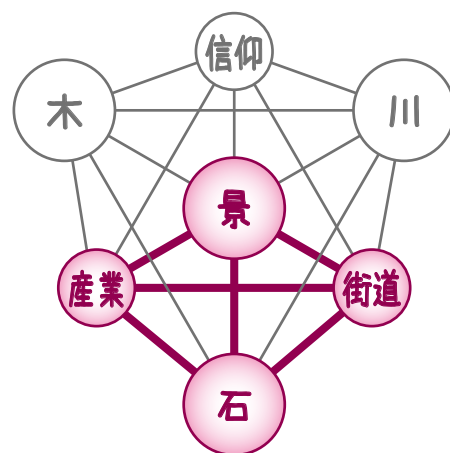
日の出町の石灰産業は、江戸時代の八王子石灰窯の一員として石灰の焼き立てを行っていたことを端緒とします。

昭和4年（1929）の浅野セメント西多摩工場の進出に伴い、山村から近代工業化の原料供給地として変貌し、セメント関連の業種が活況を呈しました、人口の増加に伴い、道路、橋梁、病院の建設など各種インフラの整備が図られ、社会生活の向上がもたらされました。

また、セメントや石灰岩を運搬する鉄道網の整備は、伝統的な産業である林業の材木、卒塔婆などの搬出に関しても利便性が向上し、新しい産業と伝統的な産業の両者の発展に相乗効果をもたらしました。

これら、昭和初年のインフラ整備に関する建築物には、旧武蔵岩井駅舎、旧大久野郵便局、藤太軒理容所、セメント関連施設や社宅などが現在も残されています。

また、戦後、西多摩郡で唯一の社会教育施設であった大久野公民館は、日本セメントの助力により建築されたものであり、現在も多くの住民により活用が図られて、今日に当時の繁栄を伝えています。



<位置づけ>



<かつての武蔵岩井駅>



<大久野線を走る蒸気機関車>

② 主な構成要素とテーマの関連性

エントモノチス化石産地：勝峰山や岩井の貝沢は、秩父帯中帯（川井層）に含まれ、古生代石炭紀（3億4千5百万年前）～中生代ジュラ紀（1億3千6百万年前）の水成岩で構成されています。エントモノチスは中生代三畳紀、フズリナは古生代石炭紀～ペルム紀の示準化石です。

勝峰山のドリーネ：酸に弱い石灰岩は、降雨などにより溶解し特異な地形を生み出します。ドリーネは雨水が石灰岩の割れ目に沿って集中的に地下に浸透する過程で周囲の石灰岩を溶かし、すり鉢状になった石灰岩特有の地形です。

勝峰山のセメント採掘跡とセメント産業：浅野セメント西多摩工場は、昭和6年（1931）の南武線の開通によって、西多摩工場から川崎工場へのセメントと石灰岩の搬出路が整備され、関東大震災後や戦後の東京の復興や、京浜工業地帯へ原材料を提供しました。

旧大久野駅周辺の町並：旧大久野駅の周辺は、駅を中心とした道路や町並が残されています。

昭和期の建築物：旧大久野郵便局、藤太軒利用所、セメント関連施設や社宅、大久野公民館などは昭和期の繁栄を示す特徴的な建築物です。

五日市鉄道大久野線に関連する施設：大正14年（1925）に開業した五日市鉄道大久野線は、昭和57年（1982）の貨物線廃業までセメント産業と共に発展し、変遷していきました。現在は鉄道敷の跡や旧武蔵岩井駅の駅舎、旧大久野駅周辺の町並に昭和期の佇まいが残されています。



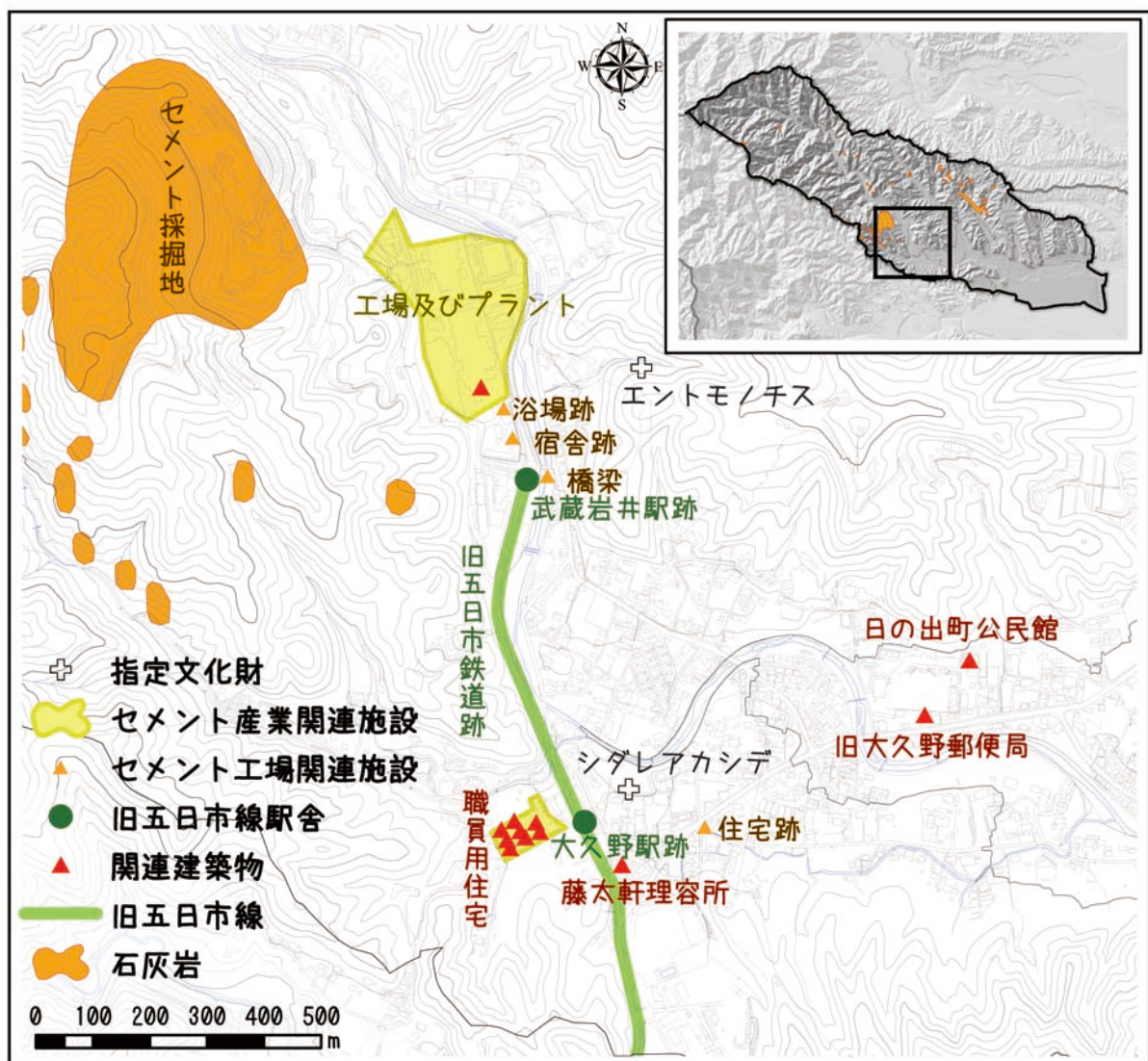
＜大久野公民館落成時の写真（昭和27年）＞



＜藤太軒理容所＞



＜セメント産業と近代化遺産の全景（イメージ）＞



＜セメント産業と近代化遺産の関連文化財群＞

③ 守り伝えるべき大切なこと

- ・セメントの原材料である石灰岩は、秩父中帯（川井層）に含まれ、地質学的に重要な示準化石であるエントモノチス（モノチスオコチカ）や、ドリーネのような特徴的な地形を形成し、特異な地形は様々な伝承や言い伝えを残しています。
- ・セメント産業の景観は、「歴史文化に関する住民意向調査」の町の代表的な景観の第7位で、多くの従事者を輩出した大久野地区では特に高く評価されています。我が国の近代から現代の工業化の基盤であるセメント産業は、昭和初年の進出に伴い、五日市鉄道や道路、橋梁など各種インフラの整備が促進され、日の出町の世界生活の変革をもたらしたものです。
- ・セメント産業の進出に伴い、昭和初年のセメント造の橋梁や河川堰、鳥居や鉄道関連跡などが町内各所にあり、昭和初期のインフラ整備の遺産となっています。また、昭和初年頃の建造物も残されており、昭和期の佇まいを今に伝えています。

④ 現状と課題

- ・昭和初期の建造物や橋梁や堰などの構造物は、関連文化財群を構成する文化財として評価し、保存と活用の仕組み作りが課題となっています。
- ・セメント産業が近代から現代の歴史文化の特徴であるだけでなく、石灰岩の形成など地質的な環境によって発生し、発展した産業であることを伝えていく仕組み作りが課題となっています。

⑤ 守り伝えるべき方策

- ・日の出町の近代から現代の特徴的な歴史文化であるセメント産業を、地質や地層、歴史的な遺産である建造物や構造物も含めて評価し、歴史文化の特徴や大切さを伝える仕組み作りが必要です。
- ・昭和初期の建造物や構造物については、文化財としての価値を評価し、保存と継承の措置を図る方策が求められています。
- ・文化財を守り伝えていくためには、文化財を知り、見て、触れる機会の充実が必要です。その機会は、学校教育や生涯学習における講座、資料館における展示などのほか、町内で行われている各種イベントとの連携を強化し、普及啓発の機会の充実が求められています。